

報告1 犯罪不安とセキュリティの暴走

— 監視カメラによる「安全・安心」の意味するもの —

Symposium on the Surveillance and Control: Question for the Hypertrophied of the Crime-Anxiety and the Health-Anxiety Runaway of the Crime-Anxiety and Security

芹沢 一也

1. はじめに

僕のプロフィールについてはリーフレットに書いてあります。一応、社会学者ですが、主な研究領域は、日本近代思想です。明治以降を対象とした思想と主義について調べています。及び、犯罪についても調べています。最近は特に犯罪を通して見る現代日本社会論ということがテーマになっております。本日は、歴史研究に携わる社会学者として発言したいと思います。後でお話になる清水先生と内容が結構被ってしまいそうですが、なるべく被らないような形でお話したいと思います。

2. 日本の治安は悪化していない

昨今の日本社会がセキュリティ社会であることは、共通の見解かと思えます。今の日本社会とはどのような性格を持った社会なのか。特に僕は犯罪を中心に発言したいんですが、犯罪に対して、日本社会は今、どのようなスタンスを持って臨もうとしているのかということが問われますが、厳罰化ということをもまず指摘したいと思います。なぜそのような厳罰化が支配的なものになっているのか。厳罰化を推進している潮流だとか勢力がその理由として言うのは、日本社会で治安が悪化しているということです。

しかしこの日本の治安が悪化しているとい



う言い方に対しては、非常に優秀な犯罪学者の皆さん、具体的には、浜井浩一さんだとか河合幹雄さんなどの犯罪学者がそういった治安悪化言説というのは神話或いは幻想にすぎない、ということを経験的な統計を駆使して明らかにしております。ですから研究者の間では日本の治安は悪化していない、というのが共通の見解です。今日は時間もないので、統計の話はしないのですが、それでは日本社会の治安状況がどんな感じなのかについて、印象的な事実、エピソードを冒頭に二つ紹介しておきたいと思います。

一つは、2007年の年末、ロイターからある記事が配信されています。その記事の内容を見てみると、2007年にニューヨーク市で発生したその年の殺人事件が、記録を取り始めた1963年以降、もっとも低くなる見通しである、というものでした。結局、その年の殺人事件が496件、記事が配信された時点では

484 件でした。500 件弱。ちなみに、ニューヨーク市における殺人事件と言うのはピークだったのは 90 年。この時は 2245 件。そのときに比べて約 4 分の 1 以下になっています。ニューヨーク市と言えば、所謂犯罪都市の代名詞だと言えるのですが、それが今や、全米中の都市の中で最も犯罪発生率が低い、安全な都市へ変貌したというのがこのロイターの記事の内容だったのです。

この記事は、日本と比較した時、興味深い。どういうことかと言いますと、ニューヨーク市がかつてないほど安全だったとされたのが 07 年です。この時、日本はどうだったのか。日本の犯罪統計を見てみると、その年の実際に殺害された件数は 476 件です。ということは、人口の 800 万人のニューヨーク市よりも、1 億人を超える人口を持つ日本の方が実数でも少ない。言いたいのは、治安が劇的に改善され、安全都市になったと言われているニューヨーク市よりも、治安が悪化した、安全神話が崩壊したと騒がれている日本の方が殺人件数がはるかに少ないという事実です。

もう一つご紹介したいのは、WHO による死因別の死亡率のデータです。それを見ると、日本の他殺率というのは際立って低いことがわかります。具体的には、WHO 加盟国、人口 100 万人以上、150 カ国の内、ジャマイカに続いて世界第二位の低さです。

要するに、日本という国は最も人が殺されていない国だということです。あらゆる統計データが示しているのは、日本という国が突出して安全な国だということなのです。それにも拘わらず、2000 年前後くらいから、司法制度の中では治安の悪化を理由にして厳罰化が押し進められているのです。何か記憶に残るような凶悪殺人事件があるとマスコミが大きく報道するので治安が悪くなっているという印象がありますが、殺人事件の件数は実際には減っています。それにも拘らず、死刑判決の数は急増しているということがありま

す。メディアで凶悪犯罪が大々的に報道される、或いは今日のテーマになっているような、社会の至る所に監視カメラが設置されるということが進んでいく。或いは地域では住民たちがボランティアで防犯のためのパトロールなんかを始めています。

3. 包摂型社会から排除型社会への変容

さて、治安が全く悪化していないにもかかわらず、何故、日本社会はこのようなセキュリティ社会になってしまったのか、というのが一つ問題になってきます。様々な可能性がありますが、私は歴史家として事実のプロセスに目をつけたいと思います。

簡単に申し上げますと、日本社会がかつてとは違った形の社会に変容していったのは、大体 90 年代末から 2000 年代初頭にかけてです。どのような形に変容していったのかを図式的に申し上げておきたいのですが、ジョック・ヤングという犯罪学者で社会学者である人がいるのですが、彼は包摂型社会、排除型社会と言う二つのカテゴリーを使っています（ジョック・ヤング著、青木秀男他訳、『排除型社会』洛北出版）。

包摂型社会から排除型社会へという変容が日本社会でなされたということです。この包摂型社会とはどんな社会かという、例えば、犯罪と言う逸脱現象があった時にその犯罪者、逸脱者を社会に再び同化させていこうという志向、或いは理念を持った社会です。そうした社会では社会復帰という理念が建前として最も重要なものとして尊重されているのです。そのような社会では犯罪者というのは家庭環境だとか、社会環境だとかそうしたものの犠牲者であるとする想像力が様々な形で働きます。

それに対して、排除型社会というのは、同じく逸脱者を前にした時、社会に同化しようとするのではなく、厳罰によって社会から排

除しようとする志向を持った社会です。アメリカが典型的ですが、刑務所があふれるくらいに犯罪を犯した人間を社会から排除しようとするわけです。そのような社会では社会復帰ではなく、犯罪が自己責任として観念される。つまり、自分が勝手に犯罪を犯したんだから、その責任は本人が負えばいいだろう、社会のせいだとか、そんなことはグダグダ言うな、そんな感じになるわけです。

そのような包摂型社会から排除型社会へという変化が、90年代末から2000年代にかけての日本社会では起きました。何かが大きく変容しています。それに伴って、法制度も変わりましたし、或いは、監視カメラという管理のテクノロジーも社会の中に浸透してきたといえます。

それでは何故、包摂型社会から排除型社会へと変容していったのか、ということですが、当然ながら、歴史の変容を説明するのに単一の原因論でかたがつくということはありません。何か単一の要因があって変化が起きたとは言えないと思います。様々な要因が折り重なりながら、或いは差異を放ったりしながら歴史というものとは変わっていくということです。

現在、事実として、日本社会のあらゆる領域でセキュリティが強化されているのですが、例えば、国家権力による抑圧というものが高まっているとか、或いは、警察権力が肥大化しているという単純なストーリーのみで説明することは不可能です。実際に起きていることはもっと複合的なものです。例えば、警察の取り締まり方針が変化したとか、或いは、メディアが犯罪統計を読み間違えて誤った形で報道したとか、或いはメディアがネタ不足なので目立つ凶悪犯罪を大々的に取り上げて人々の不安を煽ったとか、或いはセキュリティ産業が市場拡大の為にそれを利用していろいろといった様々な要因が複合する形で、つまり、互いが利益を生み出す形でセキュリティ社会というものは成立しているんだということなのです。

4. セキュリティ強化の源泉としての犯罪被害者の発見

ただそのような中で何が一番決定的だったのか、日本社会をセキュリティ社会へと変容させた要因として何が最も大きかったのかを考えた時、僕自身が言えるのは、犯罪被害者の発見ということなんですね。それを恐らく



最も大きな要因として強調できるかなと考えています。そういった観点から日本社会の90年代以降の流れについて以下では簡単にお話ししてみたいと思います。

これは様々な論者がよく日本社会をエポックメイキングな出来事として強調していますが、1995年には地下鉄サリン事件がありました。この事件は様々な影響を与えるのですが、強調したいのは、この事件をきっかけとして、日本でもようやく犯罪被害者問題の重要性というものが認識されたということです。それで被害者意識に対する関心が高まっていった。そして、同年には阪神・淡路大震災も起こっています。そういった大災害の被害にあった人達には「精神的なケア」、「心のケア」が必要だとされました。トラウマだとか、PTSD(心的外傷後ストレス障害)といった言葉は、その症状の被害者にとっての精神的な被害の深刻さを示すものとして広く使われるようになっていきました。

こうした中で翌年の96年、警察では被害者対策に関する研究会報告というものがまとめられます。そこではどんなことが言われているのかというと、これまで被害者があまりに無視され続けてきた、被害者とは、単なる捜査の事情聴取や証拠資料の提供者ではない、被害者の人権を守り、広い範囲で被害者の為の活動を行う事が警察の基本的な任務として位置付けられる必要があるということが強調されます。そういった報告がこの研究会で示されます。この報告を受けて、警察庁は同じ年に被害者対策法を発令します。この被害者対策法が、これ以降、警察における基本的な指針となっていくわけですね。

犯罪学者として浜井浩一さんはこういった動向を見て、96年という年は警察における被害者元年だったと言っています。つまり、被害者の発見と言ふべき出来事が95年の地下鉄サリン事件だとか大震災でもたらされ、被害者の発見が、警察の活動方針に大きなイン

パクトをもたらした。その後、警察庁は被害者対策に力を入れていきます。

そういった被害者対策の中で特に注目されたのは女性の性犯罪被害者の扱い方です。それ以降、性犯罪被害者が事情聴取の際に精神的な被害を受けないように、女性警察官が聴取に当たるとか、様々な施策が実施されていきます。こういった流れの中で強化されたのが、例えば、痴漢対策です。96年に鉄道警察隊が中心になって痴漢、性犯罪撲滅キャンペーンを開催されました。駅の構内にお馴染みの「痴漢は犯罪行為」というポスターが貼られて、痴漢被害の掘り起こしに力を入れ始めました。それまで痴漢というのは、女性が泣き寝入りしたり、或いは犯人の男をつかまえて職員に届けても「もうするなよ」と男を説教しておしまいだったわけですが、その警察が「痴漢は犯罪である。相談するように」と、積極的に働き掛けることで、被害者女性達が声を上げ始め、痴漢が逮捕されるようになっていったわけです。その結果、痴漢被害件数は一挙に3倍に膨れ上がっています。

ちなみに、余談めいたことを言うと、これとあわせて痴漢冤罪問題の増加があります。当然ながら、痴漢被害を警察が積極的に取り上げるようになると共に今度は逆に冤罪問題も出てきます。それで、『それでも僕はやっていない』という映画が話題になったりするわけです。何が起きているのかというと、確かに警察が痴漢という犯罪に関与し始めているんですが、こういったことは様々な影響を持っています。例えば、学校のいじめに対しても、警察が介入してくるとか、或いはDVとか幼児虐待という家庭内の問題にも警察が入っていくだとか、そういった、それまで警察が関与していなかった問題に様々な警察が入り込むようになってきたということです。

5. 少年だろうと加害者として捉える発想

こういった現象は左翼的な言い方をすると、警察権力の増大なわけです。しかしながら、他方で被害者に対する配慮が高まっているという見方もできるわけですね。両面があるといえます。

僕としては良かれ悪しかれ、日本社会というのは被害者目線に立つようになっていったと言えると考えています。被害者への配慮を重視するようになっていった、という言い方が一番一般的でしっくりするかもしれませんが、現にこの時期、DV防止法だとか、幼児虐待を防ぐための法律だとか、制度を実現させて、様々に試みられていったと言えます。

つまり、ここに見られるのは、暴力にさらされやすい女性だとか子供だとかを守ろうとする動向です。それ自体は社会から、暴力に弱い存在を守ろうとする動向ですから、それ自体は間違いなくいいことなのです。だから支持できます。民主的な社会づくりの一環だとして、評価していいかと思います。

ところが、こういった一見、善なる流れが反転していく、というところに問題が出てくるんです。その前にもう一つお話ししたいことが、社会と犯罪との関係についてです。非常にドラマティックな変容が同時期に起こっていく。その社会が、或いは人々の犯罪に対するスタンスというのが95年以降のこの流れの中で根本的に変わっていくのです。そういった根本的な転換、変容が起こったのが少年犯罪の領域です。

この少年犯罪の領域において起こった変容についても犯罪被害者という問題がとても大きな役割を果たしました。では、何故、少年犯罪の領域だったのかというと、少年事件というのは、それまで犯罪被害者の存在を最も無視してきた領域なんです。何故か。この少年法は、保護主義という理念を掲げています。保護主義のベースにあるのは、「国が親になる

思想」と呼ばれるものですが、こういった発想かという、要するに犯罪を起こした子供は家庭だとか、教育環境の犠牲者だという考えです。劣悪な家庭環境だとか、貧しい教育環境のせいで子供が犯罪に追い込まれているんだと考えます。そう考えると、犯罪を起こした少年、子供にふさわしい取り組み、処遇はというと、そういった劣悪な環境から子供を保護してやろう、そして再びまっとうな良い子に戻してやると、学校や社会に戻してやるということになります。

要するに、少年法における「少年」とは、これまでは教育、或いは教育的配慮の対象として考えられてきたわけです。ところが、その犯罪を起こした少年、たとえ、人を殺そうとも、犯罪を起こした少年を教育的な配慮で温かく包みこんであげなくてはならないという発想が、犯罪被害者という視点が登場してくると一転してしまいます。犯罪被害者の立場から見ると、まったくナンセンスなことになります。つまり、その少年に実際に身内を殺された遺族にとって、その少年は学校教育の犠牲者だとか、そういったものではさらさらなくて、単に自分の身内を殺した殺人者、加害者にすぎない、こういう発想になってきます。

6. 「善なる被害者」と「悪なる加害者」という対比的演出

日本社会にて「加害者」という言葉がこれほど流布するようになったのは、こういった事情からです。つまり、少年だろうと、犯罪を起こした加害者なんだという発想です。加害者であるからには、「罪にふさわしい罰」を受けてもらわねば困るだろう、といった発想が被害者の遺族を中心に盛り上がってくるわけです。そういった発想、或いは被害者遺族を中心とした犯罪被害者運動が盛り上がると共に、社会全体が犯罪被害者目線に、つまり、被害者側に共感していくということになりま

す。

その犯罪被害者の運動はもともとは、少年審判というのはブラックボックスで、そこで何が行われているのかというのは被害者遺族でもわからなかったんですね。最初は、ちゃんと事実を教えて欲しい、自分の息子、自分の身内はどうやって殺されたのかという事実を教えて欲しいだとか、或いはその少年が罪を犯したからには正当な罰を与えて欲しいだとか、そういったかなりまっとうな主義、主張だったのですが、それに世論が過度に共鳴して、リベラルな主義主張を超えて、厳罰感情というのが高まってきてしまったんです。それで典型的なのは、光市母子殺害事件だったんですが、ああいう形で被害者遺族側を無垢な、善なるものとして、メディアが演出するということがありました。それに対して、あの事件の犯人の少年はどうしようもない少年だとして演出されていきます。

つまり、「善なる被害者」と「悪なる加害者」という対比的な形で演出される中で、社会の少年犯罪に対する世間の目がどんどん厳しくなっていくと言えます。実際に広島高裁は光市母子殺害事件の少年に対して死刑判決を下しました。裁判所を取り巻く人々はこれに拍手喝采したという現象も起こりました。そういった中で、かつて日本社会にあった少年に対する教育的配慮というのは影をひそめていき、ついには少年法というのが厳罰化の方向で改正されたということです。こういう流れの中で、その少年という最も温かい目線の下にあった存在が、こういった形で厳罰の対象となっていったのです。こういった変化が2000年代の犯罪全体についても広がっていったといえます。

こうして犯罪者というのは単に加害者だから厳罰に処すればいいという形でどんどん厳罰化が進んでいきます。飲酒運転なんかもそうです。飲酒運転で人を殺してしまったようなケースも厳罰化で対応すべきだという形

ですね。こういう厳罰社会が現れてきました。

7. 厳罰社会化を批判することの難しさ

ここまでをまとめますと、実際に95年の地下鉄サリン事件や大震災をきっかけとして、被害者側への配慮という流れがベースにあり、少年犯罪みたいな領域でメディアが加担しながら、犯罪に対する、或いは犯罪者に対する社会の防衛意識が高められていくこととなります。そういったものが様々に複合しながら、厳罰社会ができ、或いはセキュリティ社会ができたということです。歴史的に時系列を追って見ればこういった形で90年代後半以降の社会の変化を描写することが可能なわけです。

可能なのですが、ではそういったセキュリティ社会化、あるいは厳罰社会化に対して、どういうスタンスを取っていくのか、或いは批判するとして、僕はすごく批判的なんですけれど、どう批判していくのか、という段になるとやっぱりかなり難しいといえます。というのも、こういうことがわかるからです。それまでその社会の中で潜在的なものとして押し込められてきた日常的な暴力が押し込められなくなった。例えば、児童虐待なんかは羨だとされてきたわけだし、或いはDVなんかは夫婦喧嘩だとされてきたわけです。或いはいじめなんかもそうです。そういった形で潜在的なものとして押し込められてきたものが、それらに対する嫌悪感が高まって、社会全体がそういった暴力に向き合い始め、それを排除しようとし始めたのはいいことだという理解があるのです。

要するにいいことなのです。そういった暴力、或いは、暴力のリスクにさらされることに対して、人々が忌避的になればなるほど、今度はそれが過剰になってくるわけです。過剰になってくると、日常生活からどんな小さなことでも暴力の痕跡、或いは悪の痕跡を一

切排除していきたい、無くしていきたいと、要するに社会全体をクリーンにしていきたいと、そういった過剰な要求が出てくるんですね。これは次にお話される名取先生の受動喫煙防止の問題ともかかわってくることです。

そういった過剰な要求がセキュリティ社会を後押ししています。清水先生がご専門になさっている生活安全条例などは典型的ですが、地域から子供が被害、暴力に会う可能性を完璧に排除しようという、それ自体はまっとうな心意気なのですが、それが過剰になると、ボランティアで防犯パトロールで不審者を探してみたい話になってくるわけです。何が起きているのかと言うと、例えば、典型的なのは知的障害者ですが、知的障害者がちょっと子供とじゃれたりすると、不審者として通報されてしまうとか、地域社会から暴力をなくそうとする運動が、知的障害者などの社会的弱者を排除し、苦しめる社会に反映してしまっているということです。

8. 朝日新聞による「子供を守ろう」のキャンペーンの問題点

ここではっきり言っておきたいのですが、皆さんの記憶にあると思いますが、2005年に広島と栃木で子供が殺害される事件が相次いで起きました。あの時、朝日新聞が「子供を守ろう」のキャンペーンを張ったんですね。もしあそこで「子供を守ろう」のキャンペーンを張っていなかったら、恐らく事態はここまで悪化していなかっただろうと思います。あの時、朝日は去年、小学生が殺害された事件は年に27件という数字を出したのです。これは毎月二人ずつも殺されているんだというイメージを植えつけました。実はこれは全くの統計の読み違いでした。実際に犯罪の統計を調べてみると、日本社会で小学生が見知らぬ他人によって命を失う事件は、年間数名、2、3名にすぎません。統計ではそうなります。ところが、朝日新聞が年間27件も殺され

たと書いてしまった。栃木でも広島でも子供が犠牲になった、子供を守れ、大人はやるべきことをやれ、みたいなキャンペーンを張った。それが為にあの年を境に、防犯パトロールの数が急増しました。

しかしながら、こういった動きには問題があります。PTAがそうしたキャンペーンのポスターをお母さんたちに前に貼るのです。「あなた達のお子さんが登下校の時に危なくなっている」という意識が作られます。宝くじ並みの確率の話かもしれないが、もし、それがあなたのお子さんの身に降りかかったら、というような不安を煽り立てるような展開なんです。もし、そうであるならば、数字の問題に還元できないとなります。たった一つの尊い命なんだから、それを守るために大人がやれることを尽くすのは当然なんだと、こういう反論がなされることになるわけです。

この反論に対して批判するのは非常に難しい。もちろん、メディアが煽ったのがよくないとか、或いは警察が天下りの対象としているだとかという批判はありますし、セキュリティ産業がマーケットにしているみたいな要因も指摘できるのですが、親として自分の子供を守りたいという、市民のごくごくまともな感覚もそこには含まれているんですね。そういった意識の集合に支えられて防犯パトロールというものも成り立っているといえます。

9. まとめ——管理社会批判の有効な方法とは何か

時間がなくなってきたので、まとめたいのですが、僕が言いたいのは、日本社会というのは様々な要因が複合的に絡み合うことによって、2000年前後に包摂型社会から排除型社会へと変容しているということです。そこでは犯罪が起こらないように予防的な、様々な試みがなされています。例えば、監視カメ

ラを設置してみたり、地域を住民が防犯パトロールをしたりということによってそもそも犯罪が起らないようにしているわけです。不安が煽られるので犯罪の痕跡を皆無にしたくなる欲望が高まります。その一方で、犯罪を犯してしまったような人間に対しては、教育とか更正ということを抜きに単に厳罰化すればいいだろうといった感覚的な発想が高まっています。そして死刑判決が増え、刑務所に入る人の実数も増えています。今起きているのはそういう状況です。

しかしながら、そういったセキュリティ社会を支えているものは、必ずしも悪意ばかりではない。ごくごくまっとうな住民の善意なんだというのが実は難しいところです。或いは、命を失いたくないといったような切実な

る思いもあると思います。こういった善なるもの、或いは民主的な要素も含まれている。その両方を分けけしながら、良い部分を良い方向に残していく作業をうまくしていかないとならないのだらうと思います。

つまり、管理社会化されていくのがよくないというのはわかりますが、セキュリティ社会、或いは監視カメラに対して全面的に反対ということだけを主張してもなかなか不安に取りつかれた多くの人には届かないのではないかと思います。良い部分、悪い部分を分けけしながら、なんとかその良い部分を伸ばして行って、セキュリティ社会の悪の部分を取り超えていくというのが一つの取りうるスタンスであり、有効な方法だと思います。